

— 家政学雑誌の報文分析より —

お茶の水女大 家政 佐藤 真弓

〔目的〕学問は知識の集積統合体であり、家政学の構造を形づくっているひとつひとつの単位は家政学で得られた新しい知識である。それらの知識は、論文、著書、学会における研究発表やその他出版物の中に含まれ、業績となって発表されたものである。従ってそれらを調べることは、学問の構造解明に役立つであろう。また、その学問における新しい知識が含まれた業績の中で、最も重要なものはその学問を代表している機関誌に発表された論文であると思われるので、本研究においては家政学会の機関誌である『家政学雑誌』の報文を分析し、そこから家政学の構造を把握しようと試みた。

〔方法〕『家政学雑誌』日本家政学会発行、1951年3月第1巻第1号～1988年12月第39巻第12号の全284冊に掲載されている報文約3000篇を対象資料として、調査、分析を行った。

〔結果〕①報文数の年次変化は漸次増加傾向、一冊に掲載される報文数は減少傾向にあった。②専門領域別では、被服、食物両領域で報文数全体のほぼ80%を占めた。③研究方法別にみると、圧倒的に自然科学系の報文が多かった。④平均著者数は2.1人、年次的には単著が減り、共著が増える傾向にあった。⑤引用文献分析を行い、雑誌引用率を、情報学における過去の調査結果と比較すると、家政学は応用科学的性格が強いことを証明する結果となった。家政学雑誌自身を引用している割合は、他分野雑誌と比較して高かった。

そして、家政学における新しい知識は論文の中でも特に結果考察、要約の部分、図表に表れているのではないかと考え、本調査で得られたデータを基に、家政学に於ける領域間の相互関係、勢力関係、年代変化を表した家政学の知識構造体モデルを作製した。